経済地理メモ—社会主義国編⑫—
アルバニア

地質相談所

国　名　アルバニア人民社会主義共和国（Republika Popullore e Shqipërisë）
面　積　28,700 km²
人　口　286万人（1982年）
首　都　チラネ（Tiranä）

国　土

アルバニアはバルカン半島の西北に位置し　国土は小さく　人口も少ない．　その西はアドリア海とオトラント海峡をへだててイタリアがあり　南と南東はギリシア北と東はユーゴスラビアと接している．　アルバニアは山地国で　その大部分は南北性の　ジナル山系に属する山脈によって占められている．　平野は海岸にそって幅20—30km でもって分布し　丘陵に富むが　チラネの北と南では比較的広く拡がっている．　この海岸平野はバルカン半島西部でのもっとも低いところであり　海は遠浅で　一般に船舶の航行には難があるが　ブローネ湾（ブローラ湾）は比較的深い．　平野部は亜熱帯に属して農産ポテンシャルが大きく　山地は低温・多湿である．河川は多く　いずれもアドリア海に注ぐが　最大のドリン川でも延長は 280km にすぎず　河運には適さない．河川はもっぱら水力発電と灌漑に利用されている．

住　民

アルバニアは人口が西部ヨーロッパ諸国の中ではもっとも少ない国の一つである．　しかし人口の自然増加率は高く　1970年末には 2.1％であり　1980年代半ばには3％をこえると予想され　その点ではすでにヨーロッパ最高となっている．平均人口密度はおよそ 100人／km² であるが　人口のほぼ50％は西部の狭い地域に集中し東部山地の人口密度は 15—20人／km² に下がる．　都市化が進んで都市人口は増えているが　それでも現在の人口の66％（1982年）は農村に住む．　国民の民族構成はアルバニア民族（自称はシュキペタール）を主とし（全人口の約96％）　そのほかにはギリシア人　トルコ人　マケドニア人がいる．　シュキペタールはインド・ヨーロッパ系の言語を話す単一民族であるが　北部と南部では方言・文化ともかなり異なり　北部山地にはその一部族　勇猛で鳴るゲグ族が住む．

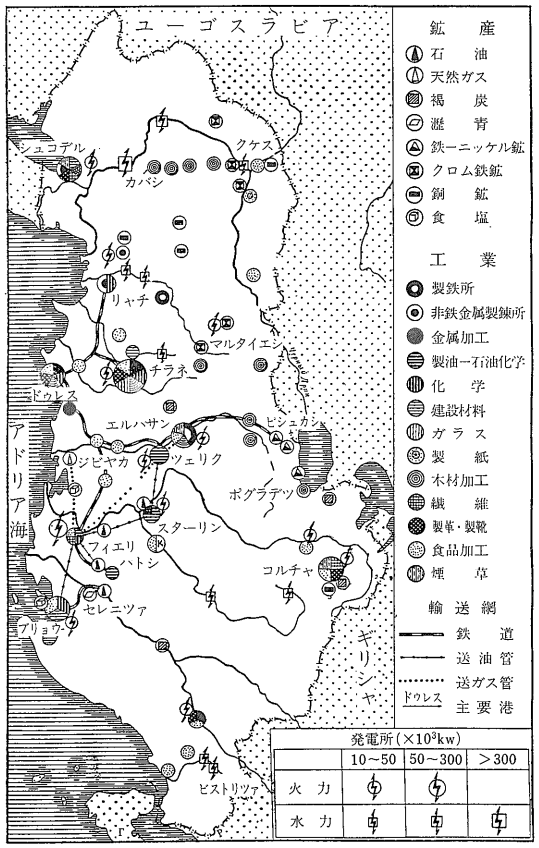
経済の一般的特徴

アルバニアは1944年秋に人民解放軍とソ連軍によってナチスドイツの占領から解放され　1946年に人民共和国の成立を宣言して経済建設に入ったが（1976年に現在のアルバニア人民社会主義共和国に改称）　それ以前はヨーロッパ最大級の貧困な国であり　たとえば1938年の工鉱業生産高は国民総生産高の８％にすぎず　鉄道もなければ商船団ももっていなかった．　1949—1950年の国民経済２か年計画　1951—1955年の第１次５か年計画に始まる累次の５か年計画によって　鉱工業生産高と農業生産高の割合が逆転し（たとえば1938年８：92 が1960年には48.4：51.6　1970年には53.4：46.6）　鉱工業生産高の伸びは1938年を１とすれば　1960年に25（農業生産高の場合は1.7）に達したが　1961年に始まった第３次５か年計画はソ連との関係が悪化して実績が停滞し　以後　中国と西欧に接近することによって事態の改善を企り　急場をしのいだ．1975年頃から中国との関係も悪化して　経済計画の実績は現在もマイナス成長ではないが　伸びなやんでいる．経済相互援助会議（コメコン）には1961年頃から参加しなくなり　現在も復帰していない．　農業の集団化は全耕地面積の95％をこえ　農地解放は徹底し　湿地の干拓農業の機械化　農業組合制度と人民公社化が国是として進められ　牧畜も拡がり　酪農も起ってきた．

鉱産と鉱業

アルバニアの鉱工業全体の中で鉱業の地位は高く　その生産高の割合は大きい．　とくに産油量は国内需要を十分ではないが　ほぼまかない　クロム鉄鉱の生産はヨーロッパ最大である．

油田とガス田は第１図に示したように分布し　その分布域はアドリア油田・ガス田生成盆地の南東縁に相当する．　その主なものとしてはパトス　クツォベ（旧スターリン）　マリンゼなど４油田とジビアケ　ブブリネの２天然ガス田があり　瀝青鉱床もブローネ付近に知られており　1928年のクツォベ油田の発見が最初である．　いずれも多層型であり　貯留層は中新統砂岩層で　産油構造は単斜・背斜・向斜である．　採油は1933年に始まり1982年の産油量は 250 万ｔ　1974年１月１日現在の総既掘産油量は 1,407 万ｔ　原油は重質　マリンゼ油田だけ



第1図　アルバニアの鉱工業配置

は中質原油である．　いずれアドリア海のオトラント海峡側で海底油田が発見されることだろう．　精油所はツェリクなど4か所に　石油化学工場はフィエルにある．なおセレニツェでは瀝青が採掘されている．

炭田は主に中新統発達盆地（チラネ盆地など6盆地）にある．　アルバニアにとって重要な炭田としてはメマリエイ　ムドリェードレノバ　メゼスドーマ（メゼス）　クラバ　アリャルプの5炭田が知られているが　産出炭はいずれも褐炭である．　しかし　それは褐炭としては炭化度が高く　硫黄分も多く　発熱量も比較的高く　エネルギー資源として利用されている．　埋蔵炭量は多くない．年産量は150—160万tである．

クロム鉄鉱はブルキゼ　マルタネシュ　クーケスの3地域から産出し　年産量は1980年代に入って110—120万tになり　年々増大している．　これは重要な輸出品の一つで　たとえば1979年の記録によると　その86.8万t（生産量の83%）が輸出された．

そのほか　オフリト湖の西　プレニャシ付近に**鉄ーニッケル**鉱床群があって　1958年から稼行され　マーチ川流域とドリン川流域では**銅鉱**が開発されていて　ルビカとクーケスの製錬所の原料鉱石に供されている．　アルバニア唯一の製鉄ー製鋼ー貫工場はエルバサンに建設されすでに稼動中であるが　それに使用されるコークス用炭はすべて輸入でまかなわれている．

交通・運輸

国内貨物量と旅客量の $^3/_4$ 以上は自動車輸送に依存し鉄道は発達していない（第1図参照）．　外国貿易はそのほとんどが海運に頼り　陸路の利用は例外的である．第2次世界大戦後の経済復興のための最大の課題の一つが輸送問題にあった．　とくに森林と山地の拡がる東部地方と海岸平地帯（人口集中帯）の間の大量の貨物輸送を保証するため　新しい舗装道路の建設　旧道の拡張と舗装が急がれ　幹線道路網がつくられたが　今後の東部地方の開発にはまだ十分でない．

鉄道は1947年に建設に着手され　それまではヨーロッパ最後の鉄道のない国といわれていた．　今ではチラネおよびリャチ　ピシュカシなどとドゥレス港の間に鉄道が通じ　さらにリャチからシュコデールへの鉄道が建設中で　将来はシュコデールからユーゴスラビアのチトーグラードまで鉄道がつながることになっている．

対外貿易および日本との関係

アルバニアの最大の貿易相手国は戦後から1960年代前半まではソ連（次いでチェコスロバキア 東ドイツ）であったが　それ以後　1970年代前半の間は中国に変り　その後は西ヨーロッパ諸国にウエイトが移り　現在はふたたびソ連や中国との貿易も復活の傾向にある．

アルバニアは1955年12月に国連に加盟し　日本がアルバニアと国交を結んだのは1981年3月で　現在大使を交換しているが　日本大使はユーゴスラビア駐在の日本大使が兼任し　アルバニア大使は中国駐在大使が兼任している．

我が国との貿易は総額で1,400万ドル（1983年：日本の対外貿易総額の0.005%）　日本からの輸出が1,000万ドル（輸出総額の0.008%）　日本への輸入が400万ドル（輸入総額の0.003%）にすぎない．

アルバニアの世界への主な輸出品は　クロム鉄鉱　ニッケル鉱　石油製品　自然瀝青　銅板　木材加工品　食品など　輸入品は工作機械　採鉱・選鉱・製錬機器　発電設備などである．

（文責：岸本文男）